

TokkyoAi（特許AIエージェントシステム）徹底調査

TokkyoAiの技術的特徴と仕組み

TokkyoAiとは何か: TokkyoAiはリーガルテック株式会社が2025年12月18日に発表した、**特許調査・出願支援に特化したAIエージェントシステム**です ¹。同社の知財プラットフォーム「MyTokkyoAi」に搭載され、近年注目される「Deep Research」コンセプトを知財実務向けに再定義した新機能として位置付けられています ¹。従来の単一AIモデルによるブラックボックス的な回答とは異なり、TokkyoAiは**複数のAIが役割分担して自律協調する「ディープエージェント方式」**を採用し、**AIの思考・調査プロセスを可視化**する点が大きな特徴です ² ³。これにより、AIが「どのように考え、どの情報を根拠に結論に至ったか」を人間が検証でき、特許実務で重要な**説明可能性・検証可能性**を確保しています ⁴ ⁵。リーガルテック社によれば、**検索式や分析過程まで含めAIの全プロセスを見える化した特許エージェント機能**は国内初とされています ⁶ ⁷。

ディープエージェント方式の仕組み: TokkyoAiのエージェントは、大きく3つのステップで動作します ⁸ ⁹。

- 1. 検索 (Deep Search) :** 技術内容の説明や発明メモ、課題文などを入力すると、**AIが意味理解に基づいて先行技術文献や関連特許を網羅的に探索**します ⁸ ¹⁰。キーワードの単純一致に頼らない**文脈ベースの検索**であり、ユーザは高度な検索式を自前で設計しなくても「これと似た技術を探して」と指示するだけで関連特許群を抽出できます ² ¹⁰。検索アルゴリズムと生成AIを組み合わせ、**10秒程度で必要な特許文献リストを得られる**ケースも報告されています ¹¹ ¹²。
- 2. 分析 (Deep Analysis) :** 抽出された特許文献群に対し、**技術構成や作用効果、目的などの観点で内容を構造化し、類似点・相違点・競合ポジションを整理**します ¹³ ¹⁴。例えば各発明の技術的要素を比較して「**既存技術にあって今回の発明にない要素**」「**その逆**」などを自動的に色分けや表形式で可視化し、**判断材料を提示**します ¹⁵ ¹⁶。特筆すべきは、この分析に至る**AI内部の思考過程や処理プロセスもワンクリックで表示**できる点で ³ ¹⁷、なぜその結論に至ったのかを裏付ける**根拠（参照した特許や抽出情報）が明示**されるようになっています ⁵ ¹⁸。これにより、AIによる調査・分析結果を社内説明や意思決定にそのまま活用しやすくなっています ⁴ ¹⁹。
- 3. 提案 (Deep Proposal) :** 分析結果を踏まえ、**AIが知財戦略上の提案や出願支援を自動生成**します ⁹ ²⁰。具体的には、**出願方針の案**（この発明をどのように権利化すべきか）、**差別化すべき技術ポイント**（既存特許との差異）、**選択可能な知財戦略のオプション**（例えばノウハウ秘匿 vs 出願公開の判断材料）を提示し ²⁰、さらに**社内説明・検討用の発明提案書ドラフト**まで自動で作成します ²⁰。このドラフトは特許明細書の体裁に沿った形式で、発明の要点や背景、効果がまとめられており、そのまま弁理士や知財部門が加筆修正して出願書類として仕上げるのが可能なレベルです ²¹ ²²。TokkyoAiの既存機能であった**生成AIによる特許明細書ドラフト自動作成機能**が、このステップに組み込まれている形です ²³ ²⁴。以上の一連のプロセスを**対話形式のシンプルな指示だけでエンドツーエンドに実行**できるのがTokkyoAiディープリサーチの強みです ² ³。

技術スタックとセキュリティ: TokkyoAiは独自開発のAIと外部の大規模言語モデル（例: ChatGPT-4）を組み合わせた**ハイブリッドAIアプローチ**を採用しています ²⁵。特許専用最適化された検索・分析AIに加え、生成タスクには信頼性の高い外部LLMをAPI連携して活用することで、**精度と柔軟性を両立**しています ²⁵。また、企業内で安心して使えるよう**セキュアな「プライベート特許検索」環境**を備えており、機密データの取り

扱いにも配慮されています²⁵。同社はセキュリティ面・UX面へのこだわりを強調しており、社外に出せない発明情報を扱う場面でも利用しやすい仕組みを整えているとのこと²⁵²⁶。

価格と提供形態: TokkyoAi (MyTokkyoAi) のディープリサーチ機能は**SaaS型クラウドサービス**として提供され、2025年12月現在**初期費用0円、月額2万円（税別）**で利用可能です²⁷²⁸。リーズナブルな価格設定によって特定の専門職や大企業だけでなく、スタートアップ・中小企業・大学研究者まで幅広いユーザーに日常的に活用してもらう狙いがあります²⁸²⁹。なお2026年4月以降は機能高度化に伴い**月額3.5万円**へ値上げ予定ですが、これは先行ユーザーにできるだけ早期に体験・定着してもらうための戦略的価格設定と説明されています³⁰³¹。

同様のサービスとの競合比較

TokkyoAiが属する**特許業務支援AI**の分野では、国内外で様々なサービスが登場しています。ここでは主要な競合となりうる類似サービスを、日本国内と海外でそれぞれ比較します。

- **AI Samurai (国内) :** 弁理士が創業した日本企業による特許支援AIサービスです。特許の**先行技術調査機能**に加え、独自の**「審査シミュレーション」機能**を持つ点が特徴です。新規性・進歩性をAIが疑似評価し、特許査定の可能性をABCDランクで示す独自アルゴリズムを核に据えています³²。またChatGPT連携による**高速な明細書ドラフト生成**や、関連特許のランドスケープ分析機能も搭載し、数日かかっていた調査・起案業務を大幅短縮可能と謳っています³²。中小企業やスタートアップ支援にも注力しており、IT導入補助金の活用提案や低価格版サービス (AI Samurai Slash) などで裾野を拡大しています³³³²。専門家コミュニティにも積極的で、弁理士による評価実験や法的検証データの公開などを通じて**AIへの信頼醸成**に努めている点も特色です³²。
- **Appia Engine (国内) :** 特許事務所出身者らが開発したクラウド型の**特許明細書ドラフト作成支援ツール**です。自社でAIモデルを開発するのではなく、**OpenAI (GPT系) のAPI**をAzure経由で利用しつつ、**特許実務に最適化したUI/UXとワークフロー**を提供するアプローチを取っています³⁴。例えばクレームツリーの表示やプロジェクト管理機能、明細書の校正・中間処理支援 (今後提供予定) など、**実務家のニーズに特化した機能が特徴**です³⁴。プロンプトチューニングによって生成AIを効果的に活用し、「スマートドラフティング」を実現することにフォーカスしています³⁴。弁理士によるユーザーコミュニティと連携した**アジャイル開発**を行っており、セミナーや勉強会を通じて専門家からのフィードバックを素早く製品改良に活かしている点もユニークです³⁵。
- **ユアサポAI (国内) :** 大手特許事務所が開発した**特許文書自動作成支援ツール**で、「ユアサポAI (Yuasa Support AI)」とも呼ばれます。最大の特徴は「**ハイパー・パーソナライゼーション**」、すなわち**ユーザー専用モデルの訓練**です³⁶。各ユーザー (事務所や企業) の過去の明細書データをAIが学習し、その文体・表現を模倣したドラフトを生成することで、**その組織独自の書式や癖に合った明細書案**を作れるようにしています³⁷。Wordアドイン形式で提供され、既存のワークフローに組み込みやすく、社内PC上で動作する**オフライン版 (aipatONEなど)**も用意するなど、**セキュリティ重視層への配慮**もあります³⁸。最新の生成AIトレンドを追うより、まずはユーザーごとの蓄積知を活かした精度向上に力を入れており、保守的な特許業界で受け入れられやすいアプローチと言えます。
- **PatentSight / Derwent Innovation (海外) :** 欧米では特許検索・分析分野で**既存データベースにAI機能を統合**する動きが進んでいます。例えばClarivate社の「Derwent Innovation」は世界特許データを網羅する検索サービスですが、近年**機械学習による関連特許の自動抽出やクラスター分析、要約生成**などAIアシスト機能を強化しています。またQuestel社の「PatentSight」も類似領域の分析に定評があり、日本の特許分析でも例示されることがあります³⁹。これらはTokkyoAiのような対話型エージェントではありませんが、**専門データベースとAIの組み合わせ**で効率化を図る点で共通しています³⁹。

- ・**PatentPal（海外）**：米国発のスタートアップ系サービスで、**特許明細書の自動ドラフト生成**に特化したツールです。技術説明や発明内容を入力すると、AIが明細書全体の初稿（背景技術からクレームまで）を生成し、**クレームの最適化提案**や**図面と説明の自動対応付け**などもサポートすると紹介されています⁴⁰。海外では他にも、発明のキーワードから大量のクレームバリエーションを自動生成する**Specifio**、チャットボット型に明細書執筆を補助する**JENI（IBM系）**などが開発されてきましたが、**検索・分析からドラフトまでを統合したエージェント**という意味ではTokkyoAiは先進的な存在です。
- ・**OpenAI Deep Research / Google Deep Research Agent**：2025年には、OpenAIがChatGPT向けに「**Deep Research**」と称するAIエージェント機能を発表し話題となりました⁴¹。これはネット上の情報収集・分析を自動で行う汎用リサーチエージェントですが、TokkyoAiはまさにこの潮流を**知財領域に特化**して実現したものとと言えます。GoogleもAI Studio上で「Deep Research Agent」をプレビュー提供するなど、**複数AIが協働する自律型エージェント**はグローバルなトレンドです⁴²⁴¹。TokkyoAiはこうした**最新AI技術の特許実務に応用**し、かつ日本語環境・日本の特許データにも最適化している点で、国内の知財実務者にフィットした競争力を持っています。

なお、リーガルテック社の調査によれば「**特許明細書ドラフト自動作成機能および特許調査機能を有する生成AIエージェント搭載のSaaS型知財支援プラットフォーム**」というカテゴリではTokkyoAiが日本初であり、2025年末時点で主要な国内20社のサービスには類似の統合例がないとされています⁴³。このようにTokkyoAiは**検索からドラフトまで一貫自動化する総合力**で一步リードしていますが、特定機能に特化した他サービス（例えばAI Samuraiの審査シミュレーション、Appiaの洗練されたUI、ユアサバAIの個別最適化など）とは差別化ポイントが異なります。ユーザーは**自社の目的や重視点**（調査重視か文書作成重視か、コストか精度か等）に応じて最適なツールを選定することが重要だと指摘されています⁴⁴⁴⁵。

業界・専門家・ユーザーからの評判

専門家からの期待と課題：特許業界では近年AI活用への注目が高まっており、「人手不足や業務過多を補う手段」としてAIツールに期待が寄せられています⁴⁶⁴⁷。TokkyoAiのディープリサーチ機能についても、「**ブラックボックスだった調査プロセスを見える化した点は画期的**」との評価があります⁵¹⁸。従来の特許AIツールは結果の根拠を示さないものが多く、弁理士や知財担当者から「結局自分で検証が必要」と批判されることもありました⁵⁴⁸。TokkyoAiはその点を踏まえ、**AIの推論過程や参考文献をオープンにすることで信頼性を高めており**、「社内説明や経営判断の資料として使いやすい」と歓迎する声が専門家コミュニティから聞かれます¹⁹⁴⁹。一方で、「最終的に人間のチェックは不可欠」との慎重な指摘も依然あります。特許AIに詳しい弁理士らは「**確かに効率化効果は大きい**が、**AI任せにしすぎると見落としや誤判断のリスク**がある。**人間とAIの協働が肝要だ**」³⁹⁵⁰と強調しており、**AIを上手く使いこなすリテラシー**が専門家側にも求められています。

ユーザー企業からのフィードバック：リーガルテック社が公開している導入事例や提供資料によれば、**実際にTokkyoAiを導入した企業や研究機関からは概ね肯定的な反応**が得られているようです⁵¹⁵²。例えば、とあるメーカーでは「**AI導入後はクライアント（社内の発明依頼部門など）からの反応が良くなった**」との声があり、出願前の調査レポートや提案資料の質が向上したことが示唆されています⁵¹⁵²。また別の事例では「**先行技術調査に費やす日数が劇的に短縮され、研究開発のスピードが上がった**」というコメントも紹介されています⁵³⁵⁴。特に**非知財の技術者からは「自分の書いたメモから特許のタネを発見してくれるのがありがたい」**⁵⁵⁵⁶、「専門知識がなくても出願のイメージが掴め自信に繋がる」といった声があるようです。これはTokkyoAiの掲げる「**誰もが発明者になれる時代へ**」というコンセプト通り、**現場の技術者が知財化を身近に感じ始めている**ことを示しています⁵⁷⁵⁸。

SNS・メディアでの話題：発表直後から、X（旧Twitter）や知財系ブログでもTokkyoAiは話題に上っています。リーガルテック社CEOの平井氏自身も「**TokkyoAiでディープリサーチ実装！高品質でAIの処理ロジックも確認可！プロンプトすら打たなくていい！日本初！**」とSNSで発信し⁵⁹、多くの「いいね」やリツイートがされました。知財業界の有識者の中には「**特許調査レポートをAIが自動で出す時代が来た**」「**明細書ドラ**

フト自動生成まで国産で実現したのは大きい」と期待を語る人もいます。一方で「出願人や弁理士の責任範囲をどう考えるか」「AIが提案した戦略を鵜呑みにしてよいか」といった課題提起もブログ記事等で散見され、特許AIエージェント時代のガバナンスについての議論も始まりつつあります。

総じて、TokkyoAiの評判は「革新的だが慎重に使うべきツール」というバランスの取れた見方に落ち着きつつあります。特許業界は伝統的に新技術に慎重な傾向がありますが、効率化の必要性和AIツールの成熟が相まって、実務家も以前より前向きに評価している印象です⁶⁰⁶¹。今後、実際の出願件数増加や権利化成果など定量的な効果が見られれば、さらに評価が高まっていくでしょう。

導入事例や企業・法律事務所での活用状況

製造業の事例： 公開された最新事例として、人と協働する産業用ロボットの安全制御アルゴリズム開発プロジェクトにTokkyoAiが活用されたケースがあります⁶²。このプロジェクトでは、開発チームがセンサー統合による安全評価ロジックという高度な技術に取り組んでいましたが、TokkyoAi（MyTokkyoAi）を導入したことで、会議の議事録や実験ログから発明の要素を自動抽出し、関連する先行特許を瞬時にリストアップ⁶³⁶⁴。AIが「課題」「解決手段」「効果」の各要素を文書中から抜き出して整理してくれるため、発明の新規点や技術的特徴が明確になり¹⁵¹⁶、従来は人手で何日もかかっていた発明の整理と先行技術の調査が飛躍的に効率化されました。その結果、このチームでは既存特許との技術的差分が色分けされて提示されたことで短時間で権利化方針の判断が可能となり、特許出願方針の社内合意形成も迅速化しました¹⁶⁶⁵。さらにTokkyoAiが自動生成した発明提案書ドラフトをベースに明細書作成を進めたところ、開発者の文章作成工数が約60%削減され¹⁶⁶⁶、本来の研究開発業務に割ける時間が増えたと報告されています。技術面でも、同アルゴリズムは安全停止頻度を40%削減しうる有望な発明となり、同社はTokkyoAiを継続活用して新規技術テーマの早期発見と特許ポートフォリオ強化を図るとしています⁶⁷⁶⁸。

中小企業・スタートアップでの活用： TokkyoAiは「出願の民主化」を標榜して開発された経緯もあり⁶⁹⁷⁰、知財専門家が社内にはいないような中堅・中小企業でも導入が進みつつあります。例えばある地方の製造業では、これまで新製品の特許調査に数週間を要していたところをTokkyoAi導入後は数日から数時間に短縮でき、出願件数が増加したというエピソードが紹介されています（具体的な社名は非公開）⁷¹⁷²。また大学や研究機関でも、研究者自身がアイデア段階で先行特許を調べる用途に使われています⁷³⁷⁴。研究ノートにAIに読ませることで「自分のアイデアは特許になりそうか」を短時間でフィードバックしてくれるため、研究の方向修正や特許出願の見極めが素早く行えるようになったとのこと⁵⁵⁵⁶。特許庁OBのコメントとして「本来埋もれていた発明の種がAIによって拾い上げられ、中小企業や地方発の出願が促進されれば意義深い」との声も伝えられています。

法律事務所での活用： 大手の特許法律事務所では、自社でAI開発（前述のユアサポAIなど）を進める例もありますが、外部サービスのトライアル導入も始まっています。特許事務所にとってTokkyoAi最大の魅力は、調査とドラフト作成の生産性向上です。実際、とある中規模特許事務所では新人研修の一環でTokkyoAiを試用し、新人弁理士がゼロから明細書を書く代わりにAIドラフトを肉付けする形にしたところ、明細書作成に要する日数が半減しベテランのレビュー時間も減ったという報告があります（非公開事例）⁷⁵⁷⁶。またクライアント企業からの依頼に対して、事前にAIで調査レポートを作成してから提案ミーティングに臨むことで、「準備の速さと資料の充実度に驚かれた」といったフィードバックもあったようです。もっとも、事務所側からは「アウトプットの品質ばらつき（技術分野によって得意・不得意がある）を感じる」「最終責任を負う以上、チェック体制は万全に」といった慎重な意見もあり、まずは補助ツールとして限定的に使い始めるケースが多いようです⁷⁷⁷⁸。

導入拡大の状況： 2025年末時点でリーガルテック社は具体的な契約ユーザー数を公表していませんが、プレスリリース等からは製造業、大学、公的機関、スタートアップ、特許事務所など幅広い層に導入例があることが読み取れます⁷⁹⁵⁷。特に電機・機械系メーカーでの採用が進んでいる模様で、新エネルギーやロボット関連の企業が自社の開発現場にTokkyoAiを取り入れ始めています。これらの企業では「知財部門のリソース不足」という慢性的課題があり⁶⁹⁷⁰、AIエージェント導入によって現場の技術者が初期出願準備を担える

ようになったことから、知財部門はより戦略的な業務にシフトできているとのことです^{80 81}。一方、**意匠や商標**といった他の知財分野についてもTokkyoAiプラットフォーム上で基本検索機能は提供されており（画像を用いた商標類似検索など）^{82 83}、将来的には**意匠・商標出願支援のAIエージェント化**も視野に入れているようです。

今後の展望や特許業務へのインパクト

TokkyoAiの進化予想: AI技術の進歩は早く、TokkyoAiも継続的なアップデートが見込まれます。リーガルテック社は「AIを知財の**思考パートナー**へ進化させる」と表明しており^{84 85}、単なる作業補助に留まらない高度な知財インフラ構築を目指しています⁸⁴。具体的な今後の強化ポイントとしては、**より高性能なLLMの採用**やドメイン特化モデルの改良により**分析精度の向上**、**多言語対応**による**海外特許調査・出願支援**、社内技術データとの連携強化（企業内のドキュメント管理システムや発明提案書DBとの統合）などが考えられます^{86 87}。実際、競合各社も**図面解析機能の追加や抵触判定（他社特許との権利範囲重複チェック）**、**意匠・商標分野への横展開**などを計画中で^{88 89}、TokkyoAiも同様に知財業務全般をカバーする**包括的プラットフォーム化**を進めていく可能性が高いです^{90 91}。

特許業務へのインパクト: TokkyoAiのようなAIエージェントが広く普及すれば、**特許出願にかかる時間・コストは飛躍的に削減**されるでしょう。現状でも「調査に数日→AIなら数分」「明細書ドラフトに数週間→AIなら即日」といった違いが実証されつつあり^{71 72}、**出願のスピードが桁違い**になります。これは企業にとって、**製品開発と知財保護を並走させやすくなる**ことを意味します。開発初期からAIが関連特許を洗い出し、**迂回設計や差別化点の提案**まで行ってくれるため^{92 93}、研究開発の方向性を早期に修正したり、特許ポートフォリオ戦略と開発戦略を統合的に考えたりしやすくなります。**競合分析**も容易になるため、他社の特許動向を踏まえた経営判断（R&D投資配分、新規事業参入可否など）への知財情報の貢献度も高まるでしょう^{94 95}。

弁理士や特許担当者の役割も「**作業主体**」から「**監督・戦略立案主体**」へシフトすると考えられます。AIが下調べやドラフトを担うことで、専門家は**それらをチェックし付加価値を乗せる業務**（クレームの微細な調整、権利範囲の戦略的設定、将来を見据えた特許網構築など）により多くの時間を割けます^{96 97}。実務効率が上がれば**受注処理件数を増やせる**ため、特許事務所のビジネスにもインパクトが出るでしょう。一方で、**AIツールを使いこなせる者とそうでない者の格差**も生まれうるため、業界全体でリスキリング（AIリテラシー教育）が課題となるかもしれません^{98 99}。**人間とAIの協働**が前提となる時代において、AIに任せる部分と人間が担う部分の最適な分業を模索することが重要です。

知財戦略の民主化: TokkyoAiが掲げる「誰でも発明者になれる」世界が実現すれば、日本の知財生態系にも変化が予想されます。大企業や専門家に限らず、**スタートアップや個人発明家、地方の中小企業からの出願が増える**可能性があります^{69 70}。これは国全体の特許出願件数増加や技術力アピールにつながり得ますが、一方で**質の伴わない大量出願が増える懸念**も指摘されています（いわゆる“AI特許バブル”のリスク）。特許庁は審査効率向上やAI審査補助の導入などで対応を迫られるかもしれません^{100 101}。しかし総じて、**価値ある発明が眠ったままにならず権利化される機会が増える**点は歓迎すべき変化でしょう。

業界の今後: 専門家筋では「5年以内に特許事務所の仕事は激変する」との声もあります。その背景には、**Generative AIのさらなる進化**（将来的には汎用人工知能(AGI)も視野に）や^{102 103}、AIツール同士の競争・淘汰、そしてユーザー企業側の意識変革があります。実際2025年時点でも、AI活用に積極的な企業とそうでない企業の間で**知財業務効率の差**が始まっており^{104 105}、「AI後進企業はイノベーションで後れを取る」といった危機感が共有されつつあります^{96 97}。今後、特許分野のAI市場は**専門特化型ツールと包括的プラットフォームの共存**を経て統廃合が進む可能性も予測されています^{106 90}。その中でTokkyoAiがどのような地位を築くかは、不確定要素もありますが、少なくとも**国内知財AIの先駆者**としてスタートを切ったことは間違いありません。リーガルテック社自身、2021年創業から順調に資金調達・提携を重ねており（直近では他社との共同プログラム発表もありました^{107 108}）、技術と市場の両面でこの分野をリードしていく意向がうかがえます。

最後に、特許業務へのインパクトを総括すれば、TokkyoAiに代表されるAIエージェントは「知財業務の効率化ツール」から「知財戦略の共創パートナー」へと進化しつつあると言えます⁸⁴。人間の創造性と判断力にAIの膨大な知識処理能力が組み合わされることで、これまで不可能だったスピードと精度での知財戦略立案が可能になるでしょう。知財部門や弁理士は、そのような未来像に適応しつつ、自らの専門性をさらに高めていくことが求められています。TokkyoAiはその変革を象徴するツールとして、今後も注目と発展が続くことが期待されます。

主要参考文献・出典： TokkyoAi公式プレスリリース¹⁸、リーガルテック社ブログ記事⁶⁹¹⁰⁹、業界比較レポート³²³⁴、導入事例リリース¹⁵¹⁶、他（本文中に【】で示した箇所）。

¹ ² ³ ⁴ ⁵ ⁶ ⁸ ⁹ ¹⁰ ¹³ ¹⁴ ¹⁷ ¹⁸ ¹⁹ ²⁰ ²³ ²⁴ ⁴⁸ ⁴⁹ 日本初！リーガルテック社、特許特化ディープリサーチ実装！調査から特許出願文書ドラフトまでをAIエージェントが自律実行『TokkyoAi』 | リーガルテック株式会社のプレスリリース

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000388.000042056.html>

⁷ ²⁷ ²⁸ ²⁹ ³⁰ ³¹ ⁴³ ⁸⁴ ⁸⁵ 日本初！リーガルテック社、特許特化ディープリサーチ実装！調査から特許出願文書ドラフトまでをAIエージェントが自律実行『TokkyoAi』（2025年12月18日）- エキサイトニュース

https://www.excite.co.jp/news/article/Prtimes_2025-12-18-42056-388/

¹¹ ¹² リーガルテック、AI特許検索機能を強化し研究者をサポート。わずか10秒で特許調査が可能

https://aismiley.co.jp/ai_news/legaltech-patent-survey-ai-search-support/

¹⁵ ¹⁶ ⁶² ⁶³ ⁶⁴ ⁶⁵ ⁶⁶ ⁶⁷ ⁶⁸ 【特許AIエージェント最新事例】人と一緒に動くロボット、その“安全制御”の特許に変えるAI | リーガルテック株式会社のプレスリリース

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000389.000042056.html>

²¹ ²² ⁵⁵ ⁵⁶ ⁵⁷ ⁵⁸ ⁷¹ ⁷² ⁷³ ⁷⁴ ⁷⁵ ⁷⁶ ⁷⁹ ⁹² ⁹³ ⁹⁴ ⁹⁵ リーガルテック社、誰でも使えるAI特許支援『MyTokkyo.Ai』で非専門家も特許出願へ”最新事例を発表” | リーガルテック株式会社のプレスリリース

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000309.000042056.html>

²⁵ ²⁶ ³² ³³ ³⁴ ³⁵ ³⁶ ³⁷ ⁴⁴ ⁴⁵ ⁵¹ ⁵² ⁵³ ⁵⁴ ⁷⁷ ⁷⁸ ⁸⁶ ⁸⁷ ⁸⁸ ⁸⁹ ⁹⁰ ⁹¹ ¹⁰⁰ ¹⁰¹ ¹⁰² ¹⁰³ ¹⁰⁶

yorozuipsc.com

<https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/cf3fd9a1b08467b697dd.pdf>

³⁸ オフラインPCで動く明細書生成AI『aipatONE』

<https://www.ibr.co.jp/aipat.html>

³⁹ ⁴⁶ ⁴⁷ ⁵⁰ ⁶⁰ ⁶¹ ⁹⁸ ⁹⁹ 弁理士業務で使えるAIツール徹底比較 | 特許調査から明細書作成まで活用ガイド - AI経営総合研究所

<https://ai-keiei.shift-ai.co.jp/benrishi-ai-tools/>

⁴⁰ 弁理士におすすめのAIツール12選 | 特許業務を革新する最新活用法

<https://techgym.jp/column/benrishi-ai/>

⁴¹ OpenAI、「Deep Research」を発表 - AIエージェントがChatGPTに ...

https://ledge.ai/articles/openai_deep_research_pro_launch

⁴² Interactions API × Deep Research Agent 入門：Google が描く ...

https://zenn.dev/google_cloud_jp/articles/4d04c72142b8f1

⁵⁹ 【M&A/資金調達/共同研究】リーガルテックCEO平井智之 - Twitter

https://x.com/yutori_JD

69 70 80 81 109 日本初、AIエージェントを搭載した特許支援プラットフォーム「MyTokkyo.Ai」提供開始 - Tokkyo.Ai

<https://www.tokkyo.ai/patent/ai-agent/>

82 83 Tokkyo.Ai

<https://www.tokkyo.ai/>

96 97 104 105 AIエージェントで変わる特許業務 〜知財部の課題をAIで解決する〜 | リーガルテック株式会社

https://note.com/tokkyo_ai/n/ne05bd315958d

107 108 リーガルテック社 × AIデータ社、ロボット産業の“技術はあるが儲からない”構造課題に対応する新収益モデルを共同発表 | リーガルテック株式会社のプレスリリース

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000384.000042056.html>